
「斑」

真那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「斑」

【Nコード】

N4879L

【作者名】

真那

【あらすじ】

空。雲。鎖。鉄格子。独房。

この世の全てには自分を表す名前を持っているけれど私には、私を表す名前がない。

いや、昔はあったのかもしれない。

この独房に閉じこめられる前は・・・。

記憶が欠損した少女と日本刀を持つ少年が歩む、ダークファンタジー。

※一部に血などの過激な描写があります※

物語は始まりを告げない

空。雲。手錠。鎖。鉄格子。独房。

この世のあらゆるものには名前がある。

道端に落ちている小石や、その辺に生えている草にさえ自分を表す名前をもっている。

この私の手首を痛める原因である銀色の鈍く光る大きな忌々しいわっかにも手錠と言う名前があるのに

私には呼んでもらえる名前がない。

いや、昔はあったのかもしれない。

私と言う存在につく名前が。

私はこの暗く、狭い独房に入れられるまでの記憶がない。

自分の名前も、両親も、今まで生きてきた私の歴史すべてが欠損している。

思い出そうとしても頭の中に広がるのは何ものも映しださない真っ白な空間のみ。

まるで初めから何もなかったかのような虚無感が胸の中に広がる。

私は、なぜ、生きている。

私は、生きているのか？

これが、生きるということなのだろうか。

暗い独房に閉じこめられ、手足を手錠で拘束され、毎日、太陽が登る時間帯になると決まって白い服を着た人間がやってきて私を独房から連れだす。

その時は目隠しをされ周りを人に囲まれて歩く。

この後何をされるかわかっていても地に足をつけ歩くその一時の間が私は好きだ。

それが冷たいコンクリートの床でも、嬉しい。

外にできればきっと太陽の熱をすった温かい地面があるのだろう。

頭では地面がどんなものかぐらいはわかってはいるが熱が、感触が、わからない。

この独房にいられる前はきっと毎日のように温かい地面を踏みしめていたんだろう。

何も思い出せないことが悲しい。

その時は決まって左胸に埋め込まれた翠色の石が大きく脈を打つ。

まるで生きているみたいに

1

「お待ちしておりましたよ。我らが天使様」

反射的に、肩が震えた。

いつもと同じ決まった挨拶

身体中にまきつき身動きを封じるようなこの男の声が聞こえた時、私は目的地についたことを知る。

「天使様」

この男は、いや、ここにいる人間は決まって私を天使様と、そう呼ぶ。

それが私の名前ではなく神話などにでてくる小さな羽を背中につけた神の使いの子どもだということは知っている。

きっと私の俗称だろう。
多分。

天使様などと呼ぶくせに酷い扱い方だ。

「ああ、天使様。そんなに震えないで。今、目隠しを外しますね」

この男の細く、骨張った大きな手が私に触れる。
まるで壊れものを扱うような、恋人に触れるような、優しい手つき

で私に触れる。

体が石になったように動かない。

呼吸をするのさえ忘れる。冷や汗が体中を伝う。

シュルツ―。

目隠しが外された。

怖い。恐い。

目を開けるのが怖い。

今日は何をされるのか怖いでも暗闇の中にずっといるのも怖い。

何よりも、あの男を視界にいれるのが恐くて堪らない

「天使様。どうしました？天使様、目を開けてください。僕を見てくださいよ」

優しく諭すように私の頬に触れる、手が、人間と同じように温かい、体温が、気持ち悪くて堪らない。

「ねえ、天使様」

逆らえない。

拒めない。

ゆつくりと、瞼を開く。

我先に、と視界に飛び込んでくる光が痛い。
こんな光なら、欲しくなかったのに。

誰か、誰か、助けて
助けてください。

助けを呼ぶ名前さえ、私は持っていないんです。

2

目を開いた先に飛び込んできたのは

曇りのない綺麗な金色の髪。黒縁の眼鏡。

羽織っている真っ白な白衣には一点の汚れもない。

「やっと、僕を見てくれましたね。気分はどうですか？天使さま」

赤い唇が弧を描く。

レンズ越しに見える青い瞳がまるで獲物を狙うように細められる。

目を閉じている時はこの男がこんな顔をしているとは夢にも思わないだろう。

私の目を隠していた布を左手で遊ばせながら目で私の答えを促す。

「・・・最悪、です」

「それはいけませんね。あなたはこの国を支える大切な方。何かがあつてからでは困ります」

後で、腕のいい医者をおあなたの部屋に送りますね。

笑顔でそう言うとお私の手をひいて色んな機械や薬品が置いてある研究室のなかを歩きだした。

・・・私の部屋とはあの独房のことだろうか。

どこまでもふざけた男だ。

研究室の中にはこの男と同じ白衣を着た人間がたくさんいて誰もが慌ただしく動き回っている。

呑気にしているのはこの男だけだ。

すれ違う人間がこの男に軽く頭を下げて会釈をしているのを見るとそれなりに高い地位の人間なんだろう。

突然男の足が止まった。

釣られて私も一緒に止まる

今日も、この時間がきた。

目の前には沢山の管が巻き付いた大きな白い機械。

機械の裏側には大きなチューブがでており、それが天井を突き抜けて空にまで向いている。

知らないうちに身体が震えていた。

「さあ、ぐずぐずしていたら太陽が昇ってしまう！太陽は月と違って目立ちたがりですからね！でしゃばられる前にいつものように儀式を始めましょう！」

その瞬間、慌ただしく動き回っていたはずの人間、全てが動きを止めた。

男は構わず腕を大きく開き芝居口調に高らかと叫んだ

「今日という1日に！我らに天使のご加護を！！」

痛。痛。痛。苦。苦。苦。死。死。死。死。死。死。死。死。

痛い、苦しい、死ぬ、死にたい、いつそ、死なせてくれ

「うア、あ、アあガ、あアあ・・・」

喉の奥からガマガエルのような潰れた酷い音が漏れた。
喉がかすれ、割れ、熱をもち今にも破裂しそうだ。

器官が震え、神経という神経が、血管が臓器が筋肉が、骨が、皮膚が、髪の毛一本一本から爪先に至るまでが、

圧迫され、収縮されたと思えば引きちぎれるかと思うほど、ねじ切れるんじゃないかと思うほど

全身隈無く電流で貫かれるような、炎で焼かれるような痛みが走る。

これが私の日課。

男の宣言と同時に

白い機械にまとり憑いているチューブが何十本も私の体に取り付けられ

左胸に埋め込まれている翠色の石の回りを囲むように細い注射針をつけたチューブが刺される。

いつのまにか白衣を着た男は大きなディスプレイがついたメインコンピュータの近くに部下であろう女性と立っていた。

「準備は整いましたか？」

「整のっていますわ。いつでも作動可能です」

「素晴らしい！さあ、太陽の光が国民に届く前に！天使の恵を！」

爛々と目を輝かせ男は笑う。そんな男を白衣の女性は表情一つ変えず静かに見上げていた

「さあ、ミレイアさん。作動させてください」

にこやかに話す男に、ミレイアと呼ばれた白衣の女性は怪訝そうに眉をひそめた

「・・・私が、ですか？」

「そうです」

「博士がなさってください」

「機械を作動させるスイッチを押すだけです。赤子の首を折るより簡単です」

「なら博士が、嫌なんですか？」

にいつと音が聞こえてきそうなほどに男の赤い唇が三日月を描いた

「……わかりました。装置を作動させます。作動許可を、リンドウ博士」

「許可します。ミレイア第一助手」

白衣の男、リンドウは笑い

白衣の女、ミレイアは笑わなかった。

カチッー。

潰れた悲鳴が、部屋に響き渡った。

夢を見た。

どこまでも白い浮雲が晴れやかな水色の空を自由に泳ぐ。その動作は遅く、緩慢で、じっと見つめていなければわからない。はたして雲が泳いだのか、それとも空のほうが流れたのか、なんてね。

空と、雲。水色と、白。

なんて、綺麗なんだろう

この空と雲の世界にこれ以上の色なんていない。

お互いがお互いを高めあい美しく表現する。

私はその二人の世界に酔いしれていた。

その時、真っ白な雲を切り裂いて、暴力的なまでに燦々と光り輝く色が現れた。わたしはあまりの眩しさに目をつぶり両手で目をおおい隠した。

あれは、何だ

この美しい世界に、何をした！！

目をつぶることで私の目に映るのはどこまでも続く黒何者をも受け入れ、休息と静粛を与えてくれる色。

ありがとう　もう大丈夫だよ

そつと目を開いた。

そこには互いを尊重しあい互いをひきたてる美しい二人の世界はなかった。

汚れなき純真無垢な白の浮雲は新たに割り込んできた強烈な色を放つ太陽の飾りに

知性と穏やかさをもつ水色の空は新たに割り込んできた強烈な色を放つ太陽の背景に

成り下がってしまった成り下がってしまった成り下がってしまった
成り下がってしまった成り下がってしまった成り下がってしまった
成り下がってしまった成り下がってしまった成り下がってしまった
成り下がってしまった成り下がってしまった成り下がってしまった
成り下がってしまった成り下がってしまった成り下がってしまった
成り下がってしまった成り下がってしまった成り下がってしまった
成り下がってしまった成り下がってしまった成り下がってしまった

どうして? どうして壊したの!? この世界にあなたは知らない!!

この優しい世界に、他人を犠牲にして輝く、あなたは知らないのよ!!

空と雲を蔑ろにした太陽を怨んで泣き喚く私に、誰かが言った。

甘えてんじゃねえぞ

この糞餓鬼が

「……っ!？」

世界が反転し、地面から体が空へと投げ出される浮遊感で一気に意識が浮上した

「……ハア、ハア、ハア……」

今のは……夢？

そのわりには嫌に鮮明に耳に残った

甘えてんじゃねえぞ

糞餓鬼が

まるで目の前で怒鳴られたかのようににはつきりと聞こえた

今だ暴れる心臓と荒れた呼吸をなんとか落ち着かせるため目をつぶり、深く深呼吸を繰り返す。

大丈夫、落ち着いて。

——ジャラ。

頬を流れる冷や汗を拭おうと腕を持ち上げると手首に嵌められた手錠に気付いた

周りを見渡せば見慣れたいつもの独房。

ああ、儀式は終わったんだ

今日も、痛かったなあ

なんで、私ばかりこんな目に会うんだろ

きっと明日も明後日も明明後日だって私が死ぬまで、この儀式が続くのだろう

容易に想像できる自分の未来にもう涙はでなくて、自分を支えてくれる過去を知らなくて、今の現在をどう生きればいいのかなんてわからない

もう、いつそのこと……

「……死にたいよ」

「そんなこと言うもんじゃない」

ポツンと漏れた本音は闇に融けることなく拾われた

「……あなた、だれ？」

声が聞こえたほうを見ると独房の外に40代半ばくらいの大柄な男が立っていたこの独房には儀式が行われる時に自分を連れ出す以外人がいたことがないので人がいるというのが異様な光景に映った

「僕は医者だ。名前はラルド。あんたの気分がすぐれないから視てやってくれとリンドウ博士に頼まれてな」

と言ってもこんな所に閉じ込められてりゃ気分が悪いのも当たり前だな。

ふざけた奴だよ

はき捨てるように紡がれた言葉には同情と苛立ちの色がみえた。

「まあ・・・なんだ、体の具合が悪い所はないか？鉄格子挟んでじゃまともに診察もできやしねえからな。儂は医者だ。なんでもいいな」

私の目をまっすぐ見て話すラルドから真剣さが伝わってくる。
だから、だからこそ・・・

この男は・・・

何、言ってるだろう

診察？こんな目にあわせたのは全部、全部・・・

「あんた達のせいじゃない」

ラルドが息を呑んだ

「……私の、喉が焼けるように、……痛いのも、……体がバラバラになりそうなくらい痛いのも、全部！何もかも、あんな達のせいじゃない！！」

気がついたら泣いていた。歯を食い縛っても嗚咽が歯の間から漏れる。

もう涙も乾いたと思ったけど乾かないものだなー。
涙腺弱いなー。涙腺って鍛えられるのかな？

ああ、もういいや。

泣こう。好きなだけ。

私に許されてる自由は泣くことぐらいしかないんだから。

手錠で拘束された腕では涙を拭うこともできず、とめどなく溢れる涙はとまることを知らず私の頬を濡らしていく

大きく口をあけてわんわんと大泣きする

無様だ。

そんな自分にもっと泣きたくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4879/>

「斑」

2011年10月7日04時59分発行